
バカとテストと召喚獣 ~ 伝説と呼ばれたバカ ~

アルたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 〱伝説と呼ばれたバカ〱

【Nコード】

N0891X

【作者名】

アルたん

【あらすじ】

松下啓吾は何処にでもいる工芸職人。相棒の吉井明久と共に踏み込んだ文月学園で待ち受けたものは、摩訶不思議なシステム…と日夜しのぎを削るバカたちだった！青春を満喫する彼等は安息の日々を送ることなく戦火の渦に巻き込まれるのだった…。

登場人物紹介1

まつした
松下 啓吾

身長 170cm前後

外見 クールなナイスガイ

性格 冷静沈着故にやや覚めているが温厚

趣味 近接用武器造り

特技 ペーパークラフト

好き 素直で寛大な精神を持つ者

嫌い 偏見者、勸善懲悪主義者

概要

明久の幼馴染で家は近く、度々出入りしており、明久からは「けいちちゃん」と呼ばれている。

両親は2人とも外国企業勤めなので仕送りを貰いながら一人で暮らしている。

中学の頃に近接武器にのめり込み、現在も武器の開発をしており、

特に木刀に関してはプロに匹敵する程の腕前。

交友関係は…今までの顧客とは面識はあり、坂本や土屋とは仲がよい。

只今身近な道具で家庭用品や改造文房具を研究中。

成績

近接武器を作る為には英語、数学、古典、歴史、保健体育の知識が必要なのでそれらに関しては300点前後。

反面それ以外は50点を切っているので総合科目は2150点程。

召喚獣

武器 ナタナイフ

20本所有。

服装 忍者

ナイフは背負ってあるリュックに内包

吉井 明久（変更点のみ）

・ 中学時代は常人離れの身体能力を持ち、150cm超の啓吾作木刀《竜光》で多くの戦士を地に沈めた経歴を持つ。当時は荒んだ振る舞いばかりで一部から《金色の疾風》と称された。

・ 吉井 玲 帰還以前から同居人がいる

第1話 プロローグへ原作第1巻編開始（前書き）

バカテスト 化学

第1問

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。

松下啓吾の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、松下君は引っかかりませんでしたね

坂本雄二の答え

『問題点……ガスを止められていたから。』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

、

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強くて、未来金属Aと
マグネシウムを合成する。』

教師のコメント

すごく強いと言われても。ゲームのやりすぎです。

第1話 プロローグ〈原作第1巻編開始〉

視点：啓吾

文月学園に入学して二度目の春が訪れた。

只今学園までの通学路を1人で爆走中。

今日に限っていつもよりかなり遅い時間まで眠ってしまったのだ。

当然朝食など食べていない。

今日はクラス発表だというのに、疲労だけが溜まり、ドキドキ感など遅刻するか否やで薄れきっていた。

「けいちゃああんまってよおおお！」

ふと呼びかけられたが、立ち止まれば遅刻確実なので振り返らずに、
「相変わらずだな。どうせゲームを夜明けまでしたんだろ？」

独特のおバカ臭を撒き散らす吉井明久は私の昔からのパートナーだ。

「急ごう。鉄人に目をつけられる。」

「うん。」

学園に向かう。

「そういえば、今日はクラス発表だけどドキドキするね！」

「明久がFクラス以外なら日本滅亡だな。」

「舐めないでよ啓ちゃん。10問に1問は解けたんだ、絶対にFクラスなんて有り得ないさ。啓ちゃんだって試験中ずっと寝ていたじゃないか。」

「あの日は熱があって問題に集中出来なかったんだ。それよりも登校時間まで3分ですがどう間に合わす？」

「全力疾走なんてどうかな！」

「走れ走れ！」

「心臓破りの坂を超えれば校門が見えてくる！」

「間に合えー！ー！」

「ズサアアアアアー！ーッ！」

「明久が校門へスライディングした。」

「目の前に佇むのは西村宗一先生。」

「吉井に松下。初日から遅刻4秒前の登校とは良い度胸だな。」

「遅れさえしなければどうということはないですよ鉄人！」

「あれだけ全速力で走ったのに明久は息切れ一つしないだこっちこっち」

はもうバテバテだ。

「に、西村先生、おはようございます…。」

俺は汗だくになりながらも挨拶した。

西村先生には生徒の間で《鉄人》と言う渾名で呼ばれている。

趣味はトライアスロン、真冬でも半袖、極めつけは2m超の鋼の肉体だ。

「おはよう…次からはもっと早く来い。」

鉄人は溜め息をつくと足元に置いてあった箱から封筒を取り出し、俺と明久に渡してきた。

頭を下げながら受け取った封筒には宛名の欄にそれぞれ『松下啓吾』『吉井明久』と書かれている。

「啓ちゃんを吃驚させてやる。」

「しかし変わった方式ですね。」

鉄人はすぐに理由を説明してくれた。

「ウチは世界的にも注目されている《試験召喚システム》を導入した試験校だからな。これもその一環というワケだ。それと早く封を切って中を確認したらどうだ？」中の確認を促す西村教諭。それに返答しながら封を切って紙を取り出す。

「クラスなんて分かってるんですけどね、特に吉井に関しては。」

「そりゃそうだろう。」

「当たり前ですよ。だってあのテストは吉井にとって難しいものだったのです。」

「ああ。しかし松下、お前は無理をしていたのだな…。」

「体調管理もテストの内ですから。」

「そうか。…吉井、何度見返しても現実が変わらんぞ。」

「まだだ！まだワンチャンあります。」

明久はFと書かれた紙を様々な視点から確認をしていた。

明久が鉄人に嘆願する。

「最下位クラスなんて最悪だ！再試験を求めます！」

俺は明久の肩を叩いて諭した。

「100回受けても結果は同じだ。」

「ならば一文字加えてEにしよう！」

「既にFクラスの一員として登録されている。」

「信じられない、この僕がFクラスだなんて…。」

そのフラグは去年から立っていたぞ。

鉄人は呆れた様子で、

「クラス発表は貴様らが最後だ。早く指定の教室に向かわんか！」

「はい。明久、行くぞ。」

「…はい。」

「すぐ慣れるさ。嫌なら《試召戦争》で上位クラスの設備を奪えばいいんだし…というかちゃんと勉強していれば上にも行けただろうに。」

そう、奪えばいいのだ。

Fクラスの設備は学年で最低らしい。

しかし《試召戦争》で勝利すれば上位クラスの設備と交換出来る。

鉄人は笑みを溢しながら、

「なら勝つために精一杯勉強させてやろう。《試召戦争》をやりた
いなら尚更努力が必要となる。俺もとことん貴様らを補習漬けにし
てやるから頑張れよ。」

「明久。向かうとするか。少し遅れたヒーロー気取りで。」

「うん。啓ちゃんが同じクラスで良かったよ！」

…単純だなあ。

「では鉄人。俺たちはこれで。」

「てつじ…時間がない。とっとと行ってこい！」

そう鉄人に挨拶をして俺達は靴を履き替えて2年生の教室がある3階に向かった。

「明久。頭の良い奴はAクラスで悪い奴はFクラスだぞ。」

「やだなあ啓ちゃんは僕がそんな事間違えると思ってるの?」

「普通の人は間違えないだろうな。」

明久はまだブツブツ言っている。

「試験の手ごたえはあったしCかDあたりの計算だったんだ。」

足し算からやり直せ。

「明久…10年間付き合ってきたんだが、『もしかするとコイツはバカなんじゃないか』と疑いを抱いていた。」

「それは間違いさ。」

と明久は微笑んだ。

「お前を疑うなんて俺こそ謝らなければならない。」

「そうだね。」

「だが疑いはなくなった…明久が疑いの余地のない真正銘のバカだということかな！」

『吉井明久

Fクラス

全てを賭して物凄く頑張りましょう』

「その一切れの紙が証明だ。」

「…もう現実から逃げなくてもいいんだね。この振り分け試験、敗けたのは僕はだったんだね。」

沈む明久を先導して3階に辿り着いた。

酷い茶番劇だ。

そこで待ち受けていたのはホテルを思わせる程の豪華な教室だった。

「…すごいね啓ちゃん。」

「Aクラスは流石に広いな。」

これには唾然とならざるを得ない。

通常の6倍の広さを持つ教室だと？

『私はこの2年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。』

大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような教師が…高橋先生とはAクラスらしい。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示される。

贅沢すぎる、他の教室の設備が悲しいことになってるんじゃないのか？

「あの先生綺麗だなあ。」

「ああ、美人さんだ。」

俺は若々しく美しいのには弱い。

『まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？』

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつて、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた

様々な食料があつてエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっている。さらに天井は総ガラス製でありながらスイッチひとつで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれていた。

『参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給いたします。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく、何でも申し出てください……。では、始めにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前にきてください。』

『…はい。』

クラスの生徒たちが注目した。

『…霧島翔子です。よろしく願ひします。』

物静かな雰囲気で穢れを近づけない神々しさを放つ。

それに黒髪を肩まで伸ばしているので、まるで日本人形のようなようだ。

視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げていく。

『……………』

聞き損ねた。

『Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように。』

こうしてはられない。

私達もクラスへと向かきましょう。

「そろそろ行こう。」

「あ、うん。そだね。…カロリーが一杯だ。」

こいつには何が見えているんだ…。

.....

二年F組と書かれたプレートのある教室についた俺達は緊張していた。

「一緒に行こう。」

「うん。」

深呼吸して一緒に

ガラッ

と開けて初撃を撃ち込む！

「「「すいません、ちょっと遅れちゃいました」「」

「早く座れ、この蛆虫野郎共。」

なるほど、見事なカウンターパンチだ。

「来るのが遅いぞ明久。今か今かと待ってたんだ。」

「相変わらず血の気の多くて仕方がないヤツだな。」

教壇に立っている男を見た。

背は高く、だいたい180cm強くらいで、見掛けはボクサーのよ
うな機能美を備えた細さを感じさせる。

視線を上げると意志の強そうな野性味たっぷりの顔をした猛獣が構
えているようだ。

短い髪がつつんと立っていてまるでたてがみのようにさえ見
える。

「…雄二、何やってんの？」

彼は明久、そして私の悪友の坂本雄二だ。

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がってみた。松下、
話は聞いたぞ。」

「ええ、どうやら女性がいるそうですねよ」

『『『『『なにー！？女性だとおおおー！！？』』』』』

耳をつんざくような男、こんなむさくるしい耳をつんざくような男、こんなむさくるしい男ばっかのクラスに居なければならぬ女性が可哀想だ。

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

明久が疑問符を浮かべた。

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。」

「世も末ですね。」

「何を言おうがこのクラスの全員が俺の奴隷って事だからよろしくな。」

ふむ、あの《悪鬼羅刹》が代表とは、これは楽しくなりそうだ。

Fクラスの面々はみんな床に座っている。

畳に卓袱台とは中々凝っているではないか…廃墟なら完璧なのが悔やまれる。

「それにしてもさすがはFクラス。ある意味珍しい設備だね。」

明久と私はとりあえずあいている席でも探そうとおもった時、不意

に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

どう見ても10代ではない。このクラスの担任だ。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので」

明久と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待つてから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。

チヨークすら無いんかい！

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

クラスメイト達が続々と不満を漏らす。

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「我慢してください」

「せんせー、卓袱台の足が折れました」

「ボンドで直してください」

「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

…これは酷い、けれども自力で問題を解決するのってやり甲斐があったりする。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、松下君、君からやってもらいましょう。」

ざわ…ざわ…。

いきなり自分をアピールするチャンスが到来！

やってやるっじゃないか！

俺は深呼吸して静かに口を開いた。

第1話 プロローグへ原作第1巻編開始 (後書き)

作者です。書くの初めてなので起承転結すらままならないですが、
未永くよろしくお願いします。

第2話 バカと美女と自己紹介（前書き）

前回、誤字脱字が多く読みづらかった事、申し訳ありませんでした！

今回はバカテストはありません。

I・K様、感想有難うございました。

より精進して参ります。

これからは前書きにバカテスト、後書きに近況報告を綴ります。

第2話 バカと美女と自己紹介

視点：啓吾

自己紹介において、第一印象が全てを決める尺度となる。

短所を極力露出せず、かつ長所を強調し、端的に述べてみせる！

「松下啓吾だ。一年間よろしくな。」

簡単に名前だけ告げて席につく。

…こんのバカ野郎！

名前だけ言っちゃった上にそのまま座るとか、何という失態だ…！

ま、まあ自己紹介が全てといつ訳では無いし、まだ慌てるような時間じゃない。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

この独特の言葉遣いといえば木下秀吉。

男装女子とは分かっていらっしやる。

去年演劇部の小道具の助っ人として行った時に出会った美女…Fクラスとは意外だ。

「というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい。」

自己紹介が終わってしまった…後でお茶でも飲み誘うかな。

「……………土屋康太。」

俺の顧客にして親友のムツツリーニか…この間も煙球や警棒を作るのを手伝ったし、話しやすい。

「…です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。」

この声はまさか…。

「趣味は吉井明久を殴る事です。」

明久が青ざめるのを見た俺は慰めに行く。

「彼女さんも同じクラスで良かったじゃない。」

「え！？島田さんも一緒！？また毎日ボコボコにされる日々が始まるんだ…。」

殴られる程度でも、女子と交流出来ると思えば痛みなんてありません…ドMホイホイ。

「ハロハロー」

島田がこちらにきずき、笑顔で手を振ってきた。

「……………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

島田の自己紹介がおわり、その後は名前を告げる作業が進む。

「僕の番だ。」

明久が立ち上り、一呼吸置いて喋る。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね」

『『『『『ダアアーリーーン!!』『』『』『』』』』』

野太い声の大合唱…気持ち悪さとノリの良さの合わせ技！

「…忘れてください。」

明久は肩身が狭くなったのか席を座った…ドンマイ。

その後はまた名前を告げるだけの作業続いていたが、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れてすみま、せん・・・」

「えっ?」

教室全体から驚いたような声が上がった。

騒がしくなるクラスの中で担任の福原先生がその姿を見て話しかけ

た。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

聞きようによつては不愉快な質問だ。

しかし、姫路瑞希の成績は俺よりずっと高いし、Aクラス最有力候補と言われた程…本来ここには居ない筈だが。

「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……。」

なるほど、試験中に倒れた女子生徒…つまり明久が介抱したのは姫路だったのか。

振り分け試験の途中退席は0点扱いになるから、結果としてFクラスになってしまった訳だ。

彼女の言い分を納得したのか、クラスの中でもちらほらと言いつの
声上がる。

「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに。」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

…バカばかりだ。

「で、ではっ一年間よろしくお願いしますっ！」

姫路は逃げるように明久と雄二の隣かつ私の真後ろの卓袱台に着く。

「き、緊張しました」

「あのさ、姫ー」姫「姫路。」

明久の声が私に、さらに雄二に遮られる。

「は、はいつ。なんですか？えーっ」と…」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「俺は松下啓吾。何とでも。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「姫路さん…体調はどう？」

明久が姫路さんの体調の話を持ち掛けた。

俺も同じ事を聞こうとしていたのでここは引く。

「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て驚く姫路。

明久が余りに不細工だからショック状態に陥ったのか、これは謝らなければ。

「「姫路。明久がブサイクですまん!」」

雄二とは気が合うようだ。

「そ、そんな!目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ…」

雄二は首をかしげながら、

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺にの知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし。」

「明久に興味持ってるなんて、余程物好きなんだな。」

「え？それは誰…」

「そ、それって誰ですか!？」

明久よりも姫路のほうが食いつきがいい…。

「確か、久保ー利光だったかな？」

久保利光…男の子。

明久が窓から飛び降りるのを阻止!

新学期初日から散々な扱い…これから一年間、明久の精神が持つのだろうか？

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

担任が教卓を軽く叩いて警告を発すると、

バキィツ バラバラバラ……

教卓はゴミ屑と化した。

「えー…替えを用意してきます。少し待っていてください。」

福原先生はそう告げると、教室から出て行った。

近くでは姫路が苦笑いをしていた。

これがFクラスの洗礼というのか。

先生が出るなり明久が雄二に用があると行って教室から出て行った。折角なので俺も外へ息を吸いに行くか。

…教室内では残りの生徒達による自己紹介が行われていた。

何人が有名人がいるらしく、幾度と教室がざわめく。

聞いたところでは須川と横溝は《リア充撲滅委員会》を設立したらしく、異性行為を行った男子を亡き者にし続けているそうで、問題ばかり起こしているらしいとのことだ。

…ちゃんとやっつけていけるのだろうか。

暫くすると先生が戻ってきたので明久と雄二と一緒に教室に入った。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

へい。」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄る姿はふざけた雰囲気醸しながらも眼力には熱が籠っていた…。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

雄二は頷く…クラス代表といっても最低クラスの成績者の中であ

たま一番に過ぎず、俺や姫路に比べればその成績は遙かに劣る。

「俺はFクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼べ。」

坂本は、ゆつくりと、全員の目を見るように告げた。

こんな馬鹿だらけのクラスが試召戦争をやったところで、勝てる可能性は低いし、これから先、成績が上がるとは限らない。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが…不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!!」「……」

一瞬にしてFクラスが炎に包まれた。

彼らの不満はもつともだ。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ!」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を要求する!」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

勉強という努力を怠った人が言える台詞では無いが、しかしここまで酷い設備だと俺も奮起せずにはいられない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、」

級友達の異常なまでの熱狂に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だ！…FクラスはAクラスに《試験召喚戦争》を仕掛けようと思う！」

狂気の沙汰だ…Eクラスならまだしも、最高クラスに挑むなど無謀なのだから。

Aクラスへの挑戦状が意味するものなど誰も理解出来る。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

須川が目を見らせた。

姫路さんという高嶺の花を抜け駆けして奪おうとはとはいいい度胸じゃないか。

それにしても、試験召喚戦争とは…ついにシステムを使う時が来た

んだな。

科学とオカルトと偶然により完成された《試験召喚システム》、これはテストの点数に応じた強さを持つ《召喚獣》を喚びだして戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

ちなみに、この学園のテストは点数に上限がないため、1時間という制限時間と、無制限の問題数が用意されている。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いた試験召喚戦争だ。

その戦争で重要になるのがテストの点数なのだが、AクラスとFクラスの点数は桁が違う。

Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか、いや、相手次第では四、五人でも負けるかもしれない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

雄二が何の根拠も無しに動くとは思えないが、現実是非情なものだ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのでき

る要素が揃っている。それを今から説明してやる。」

得意の不敵な笑みで、皆を見下ろす。

根拠…聞いてみるか。

「おい、ムツツリーニ。豊に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、ヤツは顔についた豊の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

大変な事になる…俺はそう直感した。

第3話 バカ達の侵攻！Dクラスへの挑戦

視点：啓吾

「コイツがあムツリーニの有名な性職者だ！」

《瞬撮魔》と呼ばれた男といえば、後にも先にも彼以外いない。

ビルからビルへ飛び移り、狙った被写体を驚異的な脚力で貪り、撮る。

やがて情報屋と化した男は今日も何処かで店をする…。

「なっ……あのムツツリーニか？」

「恐ろしい奴と同じクラスになっ たな；」

「見ろ、あそこまで否定してるぞ。」

「ムツツリの名に恥じない神の子…!!」

要約すれば只の盗聴&盗撮犯、だが確かな腕を持つ。

雄二はさらに述べる。

「それに木下秀吉。演劇部部长にしてAクラスの木下優子の双子の弟だ。」

「む？そこまでいわれるものかの？」

弟…男だと…何という美貌だ、興味深い！

「可愛すぎだろ。」

「秀吉、結婚してくれ……！」

「まさに男の娘のホープだな。」

「……秀吉は新たな性別を開拓した功労者でもある。」

結婚するのは俺…ゴフツ…男とはお付き合いは出来ないな（「T」）
T（）でもお友達ならきつと問題は無い。

「それに姫路だっている。」

目覚める啓吾、男の娘は二次元だけで十分だつ。

「わ、わたしですか?!」

「ああ、頼りにしている。」

「が、頑張ります!」

目が癒される…それは正に、信頼と安心の女神だ。

「啓吾、みとれていないで早くこっちに来い。」

…ふう。

俺は欠伸をしながら、雄二のもとへ行く。

教室が一瞬にして静まり返った。

先程とは冷ややかな態度：結構落ち込むな。

「こいつが…：中学時代《武器商人》とまで呼ばれた男だっ！」

うわあ、いきなりさらけ出しやがった！

「…な、なんだって!?!?!」

うってかわってざわめくクラスメイト。

「改造、修理、造作の全てをやったのける…：本当にいたのか!?!」

「数年前の名のある剣術使いはみな奴の造った物を使用したそうだし！」

「刀造りなら右に出るものはいない…：この学園にある竹刀は全て松下が提供したらしい！」

「さんを付けるよデコ助野郎！」

なんでそこまで知ってるんだ！

匿名で寄付したのに…：バレバレだっ！

兎に角、誤魔化そう。

「ま、松下啓吾、だ、…出来れば松下と呼んでくれ。昔は確かにそ
つちの仕事をしていたが、現在はまったくインテリアに関してやっ
てるから、引かないでくれよ、な？」

「「「師匠と呼ばせて頂きます！」「」」

もう遅かった…。

落ち込む俺に雄二が肩を叩く。

「済まなかったな。全ては士気を上げる為、なあに、七十五日経て
ば忘れるさ。」

こいつ他人事だと思って…ま、いつか。

俺が席に戻るなり、雄二が明久を呼びつける。

「最後に…このクズが吉井明久だ。」

Fクラスは無に帰した。

然り気無く酷いことを…。

「吉井明久？誰だそれ？」

「っていうか、吉井って奴うちのクラスにいたか？」

さっきまでダーリンと言われていたのに忘れられるのが余りにも早
すぎる。

「ちょっと、なんで今僕の名前を挙げるのさ雄二い！」

「分からないのかバカ久？だったら教えてやる。こいつの肩書きは
《かんさつしよぶんしや観察処分者》だ。」

沈黙の後、

「おい、観察処分者って……」

「確かバカの代名詞って言われてるよな」

「ち、違うよ。ちょっとお茶目な16歳につけられるあだ名みたいな物で……」

無駄なあがきだ。

「確かに観察処分者はバカの代名詞だ」

「雄二、キサマああああ……！」

俺は明久を押さえ、

「落ち着け、俺よりずっとマシだろ……。」

「……ごめん。」

二人悲しんでいると須川が雄二に意見した。

「話が反れたな…観察処分者って召喚獣の受けたダメージも召喚者にかえってくると聞いたが、それはろくに召喚出来ない奴が1人い

ると言って差し支え無いんだな？」

須川は中々筋がいいようだ。

観察処分者は、生徒に与えられる特別な称号だ。

成績も態度も最悪の生徒に与えられ、その名の通り、教師たちに一挙一動を監視されるのだ。

簡単に言えば学園側に明らか損害を被るといったとんでもないバカに与えられる称号だ。

更に観察処分者となった者の召喚獣が受けたダメージの何割かを生身に直撃する。

他にも特別な点が幾つかあるそうだが、そこまで詳しくないので省略する。

「居ても居なくても同じようなもんだから大丈夫だ。産廃と違ってくれればいい。」

明久が泣いている。

「もちろん、俺も全力を尽くす。」

スルー：明久よりも上野公園の鳩の方が良い待遇を受けているのだろうか？

「おい、坂本って小学生の頃神童って呼ばれてなかったか？」

Dクラスへの挑戦。

忙しくなりそうだ…回復試験でも受けるか。

- - - - -

午前中の授業も無事（授業をまともに受けていたのは姫路と俺と島田くらいだったが）に終わり、俺は明久と雄二と屋上に合流した。

屋上での昼食は清々しい…卓袱台がこんなに役に立つとは、他クラスの設備より良いかもしれない。

食事を何事もなくすませると、雄二が本題に入った。

「明久には宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる。」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている？」

「大丈夫だ、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」

俺もフォローを入れる。

「高校生にもなって暴力を振るうバカがいる訳無いだろ。何なら俺が…」

「いや、それは駄目だ。」

しかし雄二は首を横に振った。

「どうして?」

理由は直ぐに分かった。

さっきの有り様を見れば、俺は有名で、士気を上げうるキーパーソンなのだろう。

雄二は極力Fクラスの有する数少ないカードを切りたくない筈。

ましてや成績がBクラス並の俺をわざわざ敵前にさらけ出すなど愚の骨頂、自滅するようなものだ。

雄二は端的に明久にそれを説明した。

明久は納得して、

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ。行ってくる。」

「ああ、頼んだぞ。」

「雄二とけいちちゃんの足を引っ張らないようにするくらいなら僕だ
って出来るさ。」

明久も中々かつこいいい。

だが…そのやり取りは死亡フラグだ。

.....

「騙されたあつ!」

昼休み終了間際…明久の顔は原型を留めていなかった。

「やはりそうきたか。」

「やはりってなんだよ!やっぱり使者への暴行は予想通りだったん
じゃないか!」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しは悪びれるよ!」

「しかしお前が生きていたのは予想外だったな。」

「ハナから僕を殺す気だったのかよ!」

「一々喚くな、日常茶飯事だったろうが」

「鈍ってるんだからしょうがないじゃないか！」

流石の明久も2、3年サボれば凡人の拳を捌けなくなるのも仕方がない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

明久に姫路が傍に駆け寄る。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田も近づいて来た。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった…。ウチが殴る余地はまだあるんだ……。」

「ああつ！ 突き飛ばされたときに変な打ち方をしたみたいで今になって死にそうな激痛が！」

悔り難し、島田美波。

「そんなことはどうでもいい。放課後にミーティングを行うから逃げるなよ明久。」

雄二は自分の席に戻ると居眠りを始めた。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

姫路は午後の授業の予習の最終確認に行った。

「大変じゃったの。」

美女…木下弟が明久の肩を叩いて席に戻った。

「……（サスサス）」

頬をさすりながら康太がそれに続く。

「今日の収穫は？」

「……水色。」

「パーフェクトだムッツリーニ。」

「……感謝の極み（ズパツ）」

やはりムッツリーニは凄腕のカメラマンであったか。

直後、チャイムの音がなった。

…Dクラス戦は明日の午後2時半。

万全の状態で立ち向かうとしよう。

第3話 バカ達の侵攻！Dクラスへの挑戦（後書き）

こんばんは。

何とか投稿に辿り着きました。

今回は登場人物紹介2を入れます。

登場人物紹介2（前書き）

Fクラスの主要となる男子の変更点について纏めました。

登場人物紹介2

土屋 康太（変更点のみ）

・傭兵として様々な任務を行ってきた。中学生時はカメラよりも暗器を持っている事が多く、情報収集よりも暗殺が主な仕事だった。

・身体能力は機動性のみ鉄人に匹敵。残像が残る程の速さで相手を翻弄する。

木下 秀吉（変更点のみ）

・幼少時に《万能演技》を発現し、物真似に関しては、声だけでなく動作や雰囲気まで完璧にこなしてみせる。

・本来の性格は木下姉だけが解放出来る。

坂本 雄二（変更点のみ）

・小型バイクの免許を持っており、たまに翔子と一緒にドライブに出掛けている。

・中学時代は、亮と源二とPTを組んでいた。

須川 亮（変更点のみ）

- ・ 数十疋もの大鎌を使いこなし、破壊活動や殲滅戦を得意とする。
- ・ 親友にしてライバルの女性がいるが、避けたいらしく、恋愛感情は無い。だからFFF団団長なのだが。

第4話 作戦会議！Dクラスの脅威（前書き）

問 以下の意味を持つ諺を答えよ。

『？得意なことでも失敗してしまう事』

『？悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希、松下啓吾の答え

『？弘法も筆の誤り』

『？泣きつ面に蜂』

・教師のコメント

正解です。他にも？なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、
？なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります
ね。

土屋康太の答え

『？弘法の川流れ』

・教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『泣きつ面蹴ったり』

・教師のコメント

君は鬼ですか。

坂本雄二の答え

『鉢を持っていた明久が木から落ち、鉢を割った上に泣いていたから蜂に目を刺された。』

・教師の答え

君は悪魔ですか。

第4話 作戦会議！Dクラスの脅威

視点：明久

初日から一夜明け、昼休みの時間。

授業の内容を覚えることもなく、倦怠感に耐えていた。

昨日の内に回復試験は済ませたけど…焼き芋に水？だった。

雄二が僕達に指針を伝えたいらしいので、今日は皆で屋上に行くことになったのだ。

そして只今屋上への道中をまっしぐら。

「想像以上に酷いもんだな。」

雄二が不満を漏らす。

「地獄絵図だ。あんな設備じゃ誰も勉強する気なんか起こらないだろう。」

啓ちゃんも呆れた様子だ。

「Aクラスの設備は見たか？」

「あれは教室じゃなくてホテルだ。」

僕も話に入ろう。

「そこで、僕が提案したんだ。折角2年生になったんだし、《試召戦争》をやってみない？つて。」

「そうだったな。バカ久にしてはまともな提案だ。」

今更だけど雄二にだけはバカだなんて言われなくなかった。

難しい話は抜きにして欲しいけどさ。

「いやあ、だってあまりに酷い設備だからさ。」

雄二が怪訝そうな顔で覗いてきた。

「全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすつてなあ…ありえないな。」

「酷いこと言わないでよ！僕だって、興味がなければこんな学校になんかいかないさ！」

雄二は欠伸をしながら啓ちゃんを見る。

「明久がこの学校を選んだのは、試験校故に学費が安いという理由が大きい。」

ぐっ…お見通しだ、啓ちゃんにも喋ったこと無いのに。

バカ雄二ならまだしも、啓ちゃんは賢いし僕のことをよく知っているんだつた。

「白状しろ。どうせ好きな女の子に好かれたいが為に成績だけでも上げようって魂胆だろ？」

雄二は鋭い！だが甘い。

究極の嘘について隠し通す！

「あー、えーっと、それは、その…姫路さんの為なんだ！」

沈黙。

雄二はポカンとした。

啓ちゃんは恥ずかしそうにしている。

僕は何かが終わった気がした。

「雄二、今の無し。」

無しにしてくれる程の脳を雄二は持っていない。

「雄二…明久はこんなに面白いことを言い漏らしたけど…こ、ここのうのは？」

啓ちゃんがデレデレした様子で額に手を当てる。

「あ、ああ、驚いた…理由を言い当ててやろうと思ったが…こんなにストリートに言うとは…明久らしいな。」

、一番知られたくない二人に知られた…もうお嫁にいけない！（）

「T | T」)

「そ、それより…明久が姫路の為に戦争を起こそうとしているのは分かった。大方振り分け試験のときに姫路が倒れてFクラスになったのをバカ久が聞き付けたか助けたかしたんだろ。」

見事に言い当てられた。

「だから明久は姫路にAクラス環境にいて欲しいと…かつこいな。雄二もホントは全部知ってて尋ねたな？」

「まあそんなことだろうと思っていた。だが理由はどうであれ、俺も戦争をやりたいと思ってる所だったし、勝てる作戦も思いついたからな」。明久に乗ってやってもいい。」

この発言は意外だ。

「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力だけが全てじゃないって、証明してみたくてな。勉強だけ出来る奴等の鼻を明かすのも悪くない。」

何だか分からないけど凄いや。

啓ちゃんが微笑んで後ろを指差した。

振り返ると須川君と秀吉とムツツリー二が手を挙げて振っていた。

僕は暫く立ち止まっていたけど、直ぐに皆を追った。

.....

視点：啓吾

雲一つない空から眩しい光が春風とともに突き差されるのを気持ち良く感じる。

「さて、五時間目の後は戦争だ。」

雄二はそう切り出した。

「一応今日の午後２時半に開戦予定と告げてきたよ。」

明久は元気良く応じる。

「じゃあ、先に昼御飯を済ませるかのう」

「……栄養補給は大事。」

「そう思っならパンでもおごってよ。須川くん。」

「お前に金をかけるくらいなら溝に投げる。」

「マジ！？ばかぁ嬉しいよー！」

拾いにいくんかい！

明久とは対照的に、木下弟は真剣な眼差しだ…透き通った瞳の奥から熱いハートが垣間見える。

俺は明久に、

「明久…いくらまともに食べられないにしても、クレクレ厨の真似は…」

「明久。自業自得だ。」

雄二の言う通りだ。

「雄二…何が言いたいのさ。」

「お前の主食って…水と塩だろう？足りるのか？」

「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさ！」

水と塩と砂糖って、食べるとは言わないぞ…。(; ;)

「舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

明久も俺の両親が仕事の都合で海外にいる為、一人〜二人暮らしをしている。

親からの仕送りはあるが、その大部分はゲームや漫画に消える。

「明久：綺麗な美人さんと住んでいるのに、どうしてこうなるんだ。」

「（ガタツ）吉井、返答次第ではクロス」

「待つんだ須川くん。僕が、塩と砂糖以外のものを有している筈がないじゃないか。啓ちゃん変なこと言わないでよ！」

「確か：3-Aの《佐山 曉美》じゃ無かったか？」

雄二、ナイスアシスト。

「フーズイット」

俺は2、3年前から彼女と明久と何度も遊びに行ったり勉強したりしている。

須川の殺気を感じたのか明久は汗だくだ。

「……5W1Hの文末のイントネーションは」

康太の的確な突っ込みに明久はテヘッ っとした。

「松下。吉井を殺したいんだが。」

「落ち着け須川。ムツツリーニが調査した結果だと、明久は1%くらいギリギリセーフだ。」

「ツチ。異性行為を発見次第吉井を社会的に抹殺する。松下、観察をお願いする。」

雄二が声を荒げ、卓袱台を叩いた。

「お前らなあ。話をずらすな。作戦会議するぞー。」

「……居候プレイ。グハアツ！」

ムツツリーニ は たおれた

めのまえが まっくらに なった

「松下。バカはほつとくぞ。」

「うむ、わしらだけでもDクラスを倒す方法を考えるのじゃ。」

「ええ、木下ー」

「秀吉で良いぞ 啓吾よ。」

呼び捨てにされた拳げ句に啓吾呼ばわり…最高じゃねえのお！

「さてと、皆の回復試験は殆ど終わった。後は松下と姫路が何科目か終わっていないくらいだな。思ったよりも回復のスピードが早い。感謝しねえとな。」

きのs…秀吉が疑問を投げ掛ける。

「雄二よ。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなのじや？段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「その事に関しては当然考えがあつてのことだ。」

「考えとはなんじやろうか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでも無い相手な上に、メリットが無い。」

幾らなんでも無茶だ。姫路や俺はまだしも、後の面子は雄二以下だ。

試験の点数で振り分けを行われているので、Eクラスは俺達のFクラスより点数は高い。

「だとしてもFクラスとEクラスの平均の差はせいぜい200点程度、姫路と松下の敵じゃない。」

「つまり、お主はAクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いって言いたいのじやな。じやがDクラス以上は真つ向勝負だと流石に厳しい…そういうことかのか？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

俺も進言する。

「なら尚更Eクラスに挑んだ方がいいんじゃないのか？」

雄二は首を横に振る。

「駄目だ。初陣でEクラスを狙うようじゃ、あいつらに『やはりAクラスは無理なのか』と思われてしまう。そうならないように明らかに格上のDクラスを派手にぶっ潰して、今後の景気づけにした方が、土気は上がる。これは言うまでもなく、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだ。」

成程。

秀吉は、

「その話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いわけじゃな？」

「負けるわけ無いさ…本気になったFクラスに叶う奴なんかいると思うか？ま、お前らが俺に協力してくれるならの話だが。」

「とはいえ相手は格上じゃ。気を引き締めていかねばならぬのう。」

雄二は不敵な表情で笑う。

「俺らのクラスは最強だ。何故なら、お前らがいる。俺を信じる松下、中学時代に潜って来た修羅場を思い出せ。」

ああそつだ、忘れていた。

ここにいるのは…いい感じにネジのぶっ飛んだ親不孝者ばかりじゃないか。

「こつなつたらやるだけやる。雄二…俺を使いな。」

「勉強する。足を引っ張らぬようわしも頑張るのじゃ！」

戦いが始まる。

違った目的を志しながら、一つとなったFクラス。

打倒Aクラス。

「作戦は2時に説明する。」

ここに、最下層（Fクラス）が最上層（Aクラス）に対する下克上が始まった。

…あそこで戯れている3人は何しに来たんだろう。

- - - - -

視点：?????

「2・Fが新学期二日目から戦争か…。」

「Dクラスと殺るらしいね アンタはどっちが勝つと思う?」

「さあな。FクラスもDクラスも化物ばかりだし、荒れるんじゃないかな?」

「ああ、あの化物共がね。こわいもんだねー。」

「お前の方が恐いな…。」

「そーかな？アンタの頭の中身の方が余程ブツ飛んできると思っけど。」

「言ってくれるな。しかく楽しくなって来たじゃないか。」

「一心不乱の大戦争が出来るんだ…何でもありだね。」

「血が騒いで来たようだな？」

「アンタはどう？」

「昔から行動しないのは性に合わないタチだし…動き出すとしよう。」

「まっお手並み拝見といくよ。そしてその暁には…。」

「そうだ相棒。あいつらをあいつらを、かつて敗北に追いやり全てを失った俺達のように追い込み、酷いことをしてやるうぜ。なあに、急ぐことは無い、3年待ったんだ。数時間、数日、数ヶ月待つ事などどうということはない。今に見ている…恐怖に沈めてやる…クツクツクツ、ハツハツハツ…！！！」

第4話 作戦会議！Dクラスの脅威（後書き）

本日二話目の更新です。

いつの間にかPV3000、週間アクセス3000を達成しました。

これからも本小説をよろしくお願いします。

第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣（前書き）

問題（数学）

以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、??の中から選びなさい

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? 3 \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希、松下啓吾の答え

$$(1) X = \frac{\pi}{6}$$

$$(2) ?$$

・教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

(1) X II およそ3

・教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

・教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

須川亮の答え

(2) オーディエンスを使います！

・教師のコメント

これは某四沢クイズ番組ではありません。

坂本雄二の答え

(2) テレフォンを使わせてもらおう。

・教師のコメント

試験中に電話するのは禁止です。

第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣

視点：啓吾

- 14 : 15 Fクラス -

試召戦争の準備も無事に済んだ。

雄二はクラス全員を再集結させた。

「今からDクラスを潰すが：厳しい闘いになるだろう。だが俺はお前らを百戦錬磨、一騎当千の強者と信じる！」

雄叫びを上げるバカども。

「そつだ！俺達がFクラスだ！」

「ここには姫路さんがいるんだ！」

「秀吉いい！俺と付き合ってくれええ！」

「島田！俺と結婚してくれー！」

誰かは知らんが、秀吉を貰うとは良い度胸だっ！

雄二は続ける。

「今回はクラスを突撃部隊、中堅部隊、近衛部隊、情報収集班、予備戦力の5つの部隊を作らせてもらう。割り当ては既に決めてある。」

注目しろ!!!」

雄二は黒板大きな紙を叩き付けた！

<突撃部隊>

人数：15人

主力：啓吾、明久

概要：一人でも多く道連れにしろ！死にかけたら撤退し、回復試験を受け次第何度も突っ込め！

<中堅部隊>

人数：15人

主力：秀吉、島田

概要：突撃部隊を支援し、回復試験をする時間を稼ぐ！

<近衛部隊&代表>

人数：10人

主力：雄二

概要：俺を護れ。むやみに突っ込むな！

<情報収集班>

人数：5人

主力：ムッツリーニ、須川

概要：敵の戦術を盗撮盗聴せよ！

<予備勢力>

人数：5人

主力：横溝

概要：全部隊への支援、回復試験の迅速を図れ！

明久が手を挙げ質問する。

「どうして主力に姫路さんを入れなかったの？」

「姫路はまだ全ての教科を回復していない。一応近衛部隊の所属になるが、出番は0に押さえるつもりだ。」

「……雄二は敢えて啓吾を最前線に入れ、姫路がFクラスに存在しないように見せかけるつもり。」

明久は俺を見て成る程という顔を見せた。

明久と俺は最前線か：雄二としては俺に点数の高い科目で勝負させ、敵の戦意を喪失させようとしているんだな。

数より質が重要になる試験召喚戦争では、基本的に下位クラスが不利となる。

だが質は点数だけで決まるのではない。

高度な連携、適材適所への配置、奇抜な作戦が噛み合う事が絶対だ。

雄二は俺の肩を叩く。

「基本的に俺の指示に従ってもらおう。だが戦争は現場で起こる。俺はお前を助けるつもりない：突撃部隊はお前と明久に任せきりにする。頼むぞ。」

「了解…基本的に独自に行動するが、お前が奇襲された場合はどうすればいい?」

「俺が奇襲されるまでに敵の代表の首を獲れると思うんだが。」

「無理難題を言うな。」

「自信が無いのか?」

俺は震える右腕を押さえる。

「まさか。武者震いだ。」

「お前は隊長だ。職人の手解き、見せてもらう。」

「ああ…期待に応えるくらいに頑張らせてもらう…しかし負担が重いな。」

「お前の力の高さはよく知っている…並の働きでは許さん。」

「…ッ。試されるのは好きじゃないが、良いプレッシャーだ。突撃部隊だけで勝つつもりでいかせてもらおう。」

俺は雄二と拳をぶつけ合った。

雄二は主力を全員呼び、最終調整に入る。

「先ずは松下率いる突撃部隊がDクラスと殺り合う。秀吉のいる中堅部隊は状況を把握しつつ援護しろ。ムツツリー二と須川は情報を

集める。近衛部隊と予備勢力はここで待機しろ！」

「合点承知じゃ。」

「……了解。」

「ムツツリーニの援護なら任せてくれ。」

「頑張つて援護するよ。」

秀吉、島田、ムツツリーニ、須川、横溝は部隊に指示を出しに向かった。

「松下。お前も逝つてこい。」

「征くさ……死ぬなよ。」

俺は明久とDクラスのある方向を見る。

チャイムが鳴り響く。

Fクラス対Dクラス……火蓋は静かに、激しく切つて落とされた！

.....

視点：源二

俺は清水さん、塚本君、そして美紀に協力してもらい、対策を講じているものの、深刻な情報不足に頭を抱えていた。

開戦時間まで20分も無いというのに、決定的な作戦が立てられない。

加えてクラスメイトの殆どが格下との戦いが面倒なのか、熱意を感じられない…。

美紀は心配そうに俺にお茶を出す。

「Fクラスが相手とは言え、コンディションは最悪だね…。」

「うん…降伏しようかな？」

「代表がそんな弱気じゃ駄目だよ。アキちゃんが可愛いと言つことと、坂本君が元《神童》って事くらいは知ってるし。」

俺が美紀と喋っていると、清水さんが紙飛行機を飛ばしてきた。

紙を開いてみるとそこには情報が記されていた。

< Fクラスについて >

・ Fクラスは殆どが豚野郎ばかり。女性といえばドイツからの帰国

子女が1人いるくらいですが…よく知っている人なので、美春に任せてください！

・豚野郎は大嫌いですが、過小評価は出来ません！徒党を組んだ姿は…厄介極まりない上にキモいんです！

・貴方も知っているとは思いますが、あの代表にくつついている土屋と須川は要注意です！あいつらの戦闘能力は並ではありません…美春も相応には鍛えてはいますが、苦戦は必至でしょう。

追記：あの豚共は隠すのが上手く、これ以上暴かせてはくれませんでした。美紀さんよろしく伝えておいてください。

「清水さんは凄いな…。」

美紀は感服している。

「ふう…塚本君を囿にして土屋を引き付ける作戦は成功したみたいだね。」

「アキちゃん、坂本君、須川君、土屋君…中学時代にケンカばかりしていた人ばかりだね。」

美紀は吉井の写真を俺に見せる。

俺は頭を抱える。

「成績ならこっちの方が高いけど、人材はFクラスの方に流れちゃ

つたみたいだね。この有り様じゃ、他にも危険人物が居るんじゃないかと思ってしまうよ。」

「奇遇だね、私もそんな気がするよ…。」

嫌な勘が当たらなければ良いが。

「でも…面白い戦いになるんじゃないかな？」

美紀は楽しそうにする。

「面白い？君が楽しむのはいいけど、負けられない勝負なんだから…美紀は勝負事になると盲信的になりがちだから敢えて注意させて貰うよ。」

「痛い所を突いてくるね…。」

苦笑いする美紀に俺は頬杖をつく。

「でも頼りにしてるよ。中学時代に何度も助けてくれたんだから…クラスメイトの皆もきつと協力してくれる筈だし、頑張ろう！」

美紀は笑顔を見せる。

ここで俺はふと思い出すように彼女に尋ねた。

「ところで美紀。Fクラスの使者をボコボコにしたのはいいけど、脅して吐かせた方が良かったかな？」

「うん。私の制止を振り切って皆アキちゃんをタコ殴りにしたし、

どっちにしても吐かせられなかったと思うよ。」

「だけど代わりに吉井君の腕が落ちている事は知ることが出来た。」

「一見ハイリスクローリターンだけど…実は大きいよね。」

「ああ。俺と美紀は今も変わらず、厳しい修行を続けているからね…
…皮肉にも彼等の奇襲に対応は出来る。」

「私達だけじゃないよ。昨日の内にクラスメイトの肉体を観察していたけど、清水さん、塚本君、後は…仲沢さんとか面白いね。」

「仲沢さん？」

「うん。窓側の一番後ろの席に座ってる子なんだけど…。」

「ああ。転校してきた子だね…ちょっと来てもらおう。」

俺は仲沢さん？と呼んだ。

ヒュバツ、トタツ

「私に何やか用かいな？聞かれたら直ぐに答えるのが義理ってもんやね！」

！？

美紀は仕込み棒を手に彼女を威嚇した。

ざっと10mは飛んだか。

バイオレンスな雰囲気を持つ仲沢さんはニツと笑い話し出した。

「おったまげるんは仕方無いや。さつき自己紹介した通り、わては今年の春に大阪から引越してきた《仲沢好美》ちゅうんや。いきなり脅かしてすまへんなあ…せやけどダンさんら中々の腕やな。驚いたで。」

茶色と金色の混ざった髪を1つに束ね、170cm程の仲沢さんはニコツとする。

「驚いたのは僕たちだよ。」

「堪忍なー。こないなことが日常茶飯事のトコに住んどったから、これが自然体になってしもたんや。」

「仲沢さん…大阪は危ない場所なの？」

「ちやうちやう・食べ物はずまいしい、皆好人ばかりやで。」

美紀は溜め息をついて仕込み棒を仕舞う。

「源さん…この子も私達と『同じ』みたいだね。」

「ああ…清水さんだけでも大変なのに。」

仲沢さんは少し焦った様子で、

「まさか…怒つとる？」

「うづん、どつって事ないよ。」

美紀が俺を見て返答する。

仲沢さんが美紀の両手をパシッと優しく握った。

「あんた…怖ないん？わては不束でちーとばかりし身体が先走る性格やねんで？」

「怖くないよ。むしろ大歓迎だよ。」

「おおきに！あんたとは上手くやれそうやわ！よろしゅうな！」

仲沢さんは安堵した様子で俺を見る。

「ええーっと…代表はん。何用やったつけ？そうそう、好美って呼んでええよ。」

俺は席を立ち上がり、美紀に、

「いい作戦を思い付いた！清水さんと塚本君を召集してくれ！」

「はいはい。好美ちゃん…こつちこつち」

美紀は好美さんと手を繋いで清水さんの元へ行った。

俺もその直ぐ後に二人を追い掛けて行った…。

色々楽しくなる…俺の勘がそう示した一時であった。

「なッ何よ（＾―＾；）」

島田さんは思わず動揺する。

「ああ胸か。」

「アンタの指を折るわ……。小指から順に全部綺麗に（こぎ、ばき）」

僕が言い張ると島田さんは攻撃態勢を取った。

啓ちゃんが怒鳴る。

「試召戦争に集中しろ！」

島田さんは仕方がない様子で教室へ戻って行った…助かった。

今現在、最前線にいるのは啓ちゃん率いる突撃部隊で、その遙か後方に秀吉が待機している。

「いたぞ！Fクラスだっ」

「叩き潰してやる！」

「Dクラスか！押しきるぞ！」

「秀吉を守るんだあああ！！！」

召喚フィールドが拡がり、交戦状態になった！！！！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊A」 67点

「2 - F : 突撃部隊B」 61点

V S

「2 - D : 前線部隊1」 103点

幾らDクラスの生徒でも2VS1では勝ち目は無い！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊A」 45点

「2 - F : 突撃部隊B」 24点

V S

「2 - D : 前線部隊1」 0点

「0点になった戦死者は補習ううううう！！！！」

「げツ鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだ！」

「黙れ！捕虜はこの戦争が終わるまで特別講義だ！何時間かかるかわからんがたつぷりと指導してやる！！」

「鬼の補習は嫌だ！たツ頼む！見逃してくれ！あんな拷問は耐えられない！」

「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人は二宮金次郎といった理想的な生徒に仕立て上げてやるから覚悟しろ！！」

「鬼だ！誰か助けッ、イヤアアア・・・」

よし！このまま一気に行く！

「無駄な足掻きを！」

「点数が高いだけで勝てるかよ！」

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 A」 0点

「2 - F : 突撃部隊 B」 14点

V S

「2 - D : 前線部隊 2」 41点

「2 - D : 突撃部隊 3」 81点

「2 - D : 突撃部隊 4」 97点

仲間が1人やられたか…流石に避けきれない！

啓ちゃんが大声を出す！

「その3人に数学で挑む！試験^{サモン}召喚！！！」

「松下がFクラス！？」

「怯むな！多対一に持ち込め！」

「させるか！まっさんを援護する！」

僕も啓ちゃんを援護しなきゃ！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 B」 4 点

「2 - F : 松下啓吾」 3 1 4 点

「2 - F : 吉井明久」 5 7 点

「「「何だあの点数は!?!?!」」」

3 対 5 か…だが得意科目なら啓ちゃんは負けない!

啓ちゃんの召喚獣が相手に投げられる!

相手も凄い…ナイフに当たりながらも啓ちゃんにダメージを通す!

だが甘い!僕は「F 突 C」と共に点数の殆ど無い召喚獣に止めを刺した!

< 数学 >

「F 松下」 1 7 2 点

「F 突 C」 3 8 点

「F 吉井」 4 1 点

啓ちゃんは死にかけている「F 突 B」を逃がす。

残りの D クラスの前衛 4 人の後ろから援護と思われる生徒たちが 5 人来た!

啓ちゃんとたち僕は数学フィールドを放棄し、保健体育フィールドに後退した。

< 保健体育 >

「F 松下」 3 0 8 点

啓ちゃんの高得点にDクラスの生徒は攻めあぐねる。

これに乗じて僕たちも啓ちゃんを援護し、相手の前線部隊を殲滅した。

「明久！7人やられた！F突の8人は回復試験を受けて来い！」

啓ちゃんは数学と保健体育のフィールドを消してもらい、今度は日本史のフィールドを展開してもらった。

僕は駆け寄って、

「啓ちゃん！作戦は無いの？」

「無い！日本史フィールドを消したらたちまち俺の苦手教科で奴等が流れ込む！そうなたら数秒もたない！」

Dクラスも中々だ…だからこそ作戦を思いつく！

「啓ちゃん。突撃部隊全員に通達。」

啓ちゃんは汗を吹いて振り向く。

「？」

僕はこう告げた。

「啓ちゃん以外総員退避！」

殴られた、…チヨキで。

「目がツ目があッ！…！」

目潰しされた哀れな僕は地面にのた打ち回ざるを得ない。

「目を覚ましなさい、この馬鹿！…！」

「島田、流石にやりすぎだ。」

いつの間にか島田さんが戻って来ていた。

「部隊長が臆病風に吹かれてどうするのよ！…」

その覚ますべき目に激痛が！！せめてグーかパーで殴って！

僕は震えながら号泣する。

せめてビンタでお願いします。

「いい吉井？あなたの役割は出来るだけDクラスを惹き付けて前線を維持する事ですよ！」

島田さんは再度、僕に作戦の内容を述べる。

「あなたが逃げたらあいつらが補給出来ないじゃない！」

「このバカ久！」

島田さんも啓ちゃんも呆れている。

僕も流石に思い直した。

「ごめん…僕が間違ってたよ…この戦闘に勝利することだけ考えよう！」

「ええ！それに個別戦闘は弱いかもしれないけど、多対一で戦えばきつと大丈夫！」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「その意気よ、吉井！」

僕はやる気を出す…が、

『……明久、啓吾、島田！Dクラス側の前衛に援軍が15人来ている！』

ここでムツツリーニから戦況の報告が入った。

……。

「総員退避よ。」

島田さんは退避命令を出した。

「問題ないわね？」

さっきと言ってる事が全然違うよ？

しかし僕もそうだと思った。

「仕方無いよ。僕らでは荷が重過ぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。松下…。」

「言えば補習は大嫌いだ。死にたくない。」

3人の意見が一致、逃げよう。

そこへ横溝が報告しにきた。

「代表より伝令があります！」

どうやら雄二からの伝言のようだ。

「『逃げたらクロス、近衛部隊総出でな！』と！」

now loading….

「全員突撃しろおおおおッ！！！」

「逝くしかないよな明久ああああ！！！」

「その意気よ吉井！松下！」

踵を返す僕と啓ちゃん、と島田さん。

秀吉も合流する。

「生きておったか！良かったのじゃ。」

秀吉は嬉しいのか、いかにも女の子らしい表情を見せた。

「秀吉、いつも可愛い…。大丈夫？」

島田さんと啓ちゃんは啞然としている…。

「わしは無傷じゃが…お主らの点数がかなり削られてしまっておるぞ。」

今の状況はかなり点数が消耗した状態のようだ。

「これ以上の戦闘は無理じゃなかるうか」

「じゃあ、早く戻ってテストを受け直さないといけないね。そうしないとすぐにやられちゃうし。」

「そうじゃな…。時間的に一、二教科がいい所じゃな」

啓ちゃんも納得した表情だ。

「明久。俺は此処を死守する。俺がやられる前に戻ってこいよ！」

僕はすぐに点数を補充するために補給室へと向かった。

- - - - -

視点：啓吾

戦争開始から45分経過した。

明久を始めとするの突撃部隊8人が帰還した。

中堅部隊は6人戦死、重症5人とかかり削られたが、フィールドを世界史に変更、何とか前線を守りきり、予備勢力、情報収集班の援護もあり、犠牲者を出しつつも新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下をぶんどった。

土屋によれば、残存兵力はこちら31人、相手は24人：まだ油断出来ない。

やがて中堅部隊も回復試験を受け、島田だけが戻ってきた。

「試召戦争のルールは覚えてるか？」

俺は念のために明久に試召戦争のルールを確認させる。

「その科目の教師がいないと召喚は出来ないからね。」

俺と明久は新校舎へ差し掛かる。

試召戦争には色々なルールや制約がある。

とその時、ムッツリーニから連絡が入る。

『……緊急事態発生！Dクラスが五十嵐先生と布施先生を引つ張ってきた！松下は即後退！』

グツ…苦手教科か！

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「啓ちゃん！」

「無理だ…50点もない！」

「じゃあ五十嵐先生達に近付かないように学年主任の所へ行こう！」

「高橋先生ね？了解！」

そして急いで高橋主任の所へ移動しようとしたが…。

カツカツカツ…。

ゾクツ！

な、ん、だ？

足音が近付いてきた。

明久はポケットから棒切れを取り出す。

足音が消える。

「豚野郎…御姉様を汚す男は全て排除します！」

遂に出てきたか…Dクラスの主力にして危険人物…その名も《清水
美春》っ！！！！

第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣（後書き）

更新が遅れました。

駄文が多いのに、長く書きすぎた><

それでも読んで戴けるんですね…本当に有難うございます！

次回もお楽しみに！

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！（前書き）

化学

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

・教師のコメント

姫路さんには簡単でしたかね？

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

・教師のコメント

君は科学を舐めていませんか？

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

・教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

。

松下啓吾の答え

『B・E・E・N・N・N』

・教師のコメント

並び替えればいい話ではありません。

坂本雄二の答え

『ベ・ン・ゼ・ン』

・教師のコメント

あとで四人で職員室に來なさい…補習!

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！

視点：啓吾

「吉井、松下…。」

俺は唇を噛み締める。

「ああ…五十嵐先生と布施先生は化学教師だ！」

二年の化学を担当する両教諭が新校舎手前の渡り廊下に立つ。

化学は俺の苦手科目…奴ら気付いたのか？

「島田さん、啓ちゃん…」

明久は弱気になる。

「五十点も無い。」

「同じく。六十点台常連よ！」

お世辞にも良い点数とは言えないな。

「学年主任の高橋先生の所まで逃げようかな。」

「総合科目なら尚更勝てない。ここまで来て、逃げていまえば旧校舎で疲弊している中堅部隊をさらけ出す事になる。それに見上げてみるよ…俺達を返す気は無いみたいだぞ。」

明久と島田は天井を見た。

「嘘……。」「」

スタツ

「美波様。お久し振りです。」

「出来れば会いたく無かったわ。美春。」

「ふふ。強く美しい御姉様を慕い続けて1年。今日こそ美春が貴方をオトしてご覧に入れましょう！」

「

廊下の天井を這って来たのか。

理性が吹き飛ぶ。

「明久さあああ！島田を連れて教室に行けー！ツツ！！！」

驚く2人だったが、明久は頷くと島田を抱え、全速前進で走って行った。

これでいい…。こいつはここで！倒しきる！

「ああ！麗しきお姉さま、待って！」

俺は遮る。

「俺が相手するよ…清水！」

空気が変わった。

清水は憎しみの籠もる目で睨む。

「ふん…醜い豚野郎の分際で美春と御姉様の恋路の邪魔をしないでくれませんか？」

「残念だが、お前を止める必要があるんでな；試験召喚^{サゼン}！」

銃剣と大きな日本刀を持つ俺の自慢の召喚獣が出現する。

清水は舌打ちした。

「しっかりルールは守らないといけないよな…隠し持っているフォークは捨てる！」

「気付いていたんですか。知らなければ教師を呼ばずに始末出来たんですが…。」

チャラチャラ！

清水は十数本のフォークを床に落とす。

「さて、どうする？補習室に行きたいなら勝手にしろ！」

試召戦争のルールの1つ…それは『相手が召喚獣を喚び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける』という内容だ。

つまりこのまま奴が通り過ぎれば戦闘を放棄と見做され戦死者扱いとなり補習室へ連行される！

「美春の愛を邪魔するのですから、潰させてもらいます！試獣召喚！」

清水の召喚獣：西洋の刀と盾。

<化学>

「2・F：松下啓吾」47点

VS

「2・D：清水美春」95点

ダブルスコアかつ。

「ふ…噂には聞いていましたが、大した点数じゃないですか！」

「点数だけで決めれば戦争の意味は無いと思うがな！」

「ならやってみなさい…豚野郎があ！」

清水の召喚獣が剣を振りかざし俺の召喚獣を襲う。

ゴッ

「先手必勝…と思いましたが、武器の弱点は網羅しているようですね。」

清水のソードが空を切る。

「バックラーとブロードソード。バックラーは小さいが機動性が高い…防御は難しいが自分から接近し相手の剣に当てる事で、従来の欠点である死角を消すことが出来る。」

当然相手の攻撃を正確に読んで当てていく技術が要求される。

こいつ化物か！？召喚獣を操作するのは今年初めてだろ…なんだ？

まさか…一桁でゴリラ数匹分の戦闘力を有する召喚獣に身体能力が追い付いているというのか？

後ろに下がりがわし切ったが…や、ば、い！

俺は召喚獣を操作し、刀を抜く。

「豚の割には生意気に、頭腦的な方ですね。ゴリラに昇格して差し上げましょう。」

「嬉しくないな。俺はバナナは好きじゃないんだ！」

冗談言ってる場合か！満身創痍だボケ！

「はああっ！」

清水の連撃が始まった。

キンツキンツガッ！

「グッ…ちいい！」

防戦一方だ…清水は西洋剣のハウツーを知っている！

後ろに下がるだけではいずれ召喚フィールドの壁にぶつかってしま
う！

ブロードソード&バックラー…知識はあるがこんなに使いこなせる
使い手が居るのか…化物め！

思い出せ、知識を！

確か…右手に剣を握り、その拳の上にバックラーを被せるように持
つ。

基本戦術…『小さな盾は遠くに構える』原則は、籠手を必ず護る事
を意味する。

仮に籠手以外のところを狙おうとしても、俺は数十cmまで間合い
を詰めねばならない。

日本刀はそこまで間合いを詰めなくても相手を装甲ごとぶった斬れ
るが…バックラーによって手の内が隠されている以上、『構えてか
ら斬る』動作に要する隙を作ることを許さない！

「はあああああっ！」

清水は怒る事で闘気を上昇させている。

怒りは冷静さを奪い攻撃を単調化すると言われているが、言い換え
れば、こちらにとって不利な手段を繰り返される事と化す。

その道に携わる達人ならば、同じ手は通用しないのだろう。

だが俺は近接武器を造れるだけで、知識はあっても、実行出来る体力は無い！

「いい加減に美春の餌食になりなさい！」

俺は日本刀の鞘で受ける…西洋刀は斬れない刀だ！

だが何しろ位置が高すぎる…顔面を守る為に日本刀を顔の前に上げるしかない。

膠着が続く。

様子を見るべく刀を下げれば、もう一撃くる…突きを顔面に入れたら即死だ。

だが…片腕で受けられたのならばあ！

バキィィィ！

一瞬の刹那！

俺はナイフをクナイのように投げ、清水のバックラーを真っ二つにしました！

「こんのおーっ！Fクラスがあああ！」

…カランカラン。

日本刀を叩き砕かれたがな。

「く、くそ…。」

「ここまでよくやったと褒めましょう…あなたの負けです。」

清水は召喚獣に両手でブロードソードを持たせ、俺の召喚獣の元へ歩かせる。

ツーハンドソードか。

清水は冷徹な表情で現実を突き付けた。

「チェックメイトです。」

俺は目を開け言い放つ。

「ああ…覚悟は決まった。」

清水は剣を構え振り上げる。

「かかったな！その致命的な隙を見せるのを待っていた…清水美春！」

「何を根拠に…はっ！」

清水の焦り。

唯一彼女が気付かなかった誤算。

「お前は俺にフォークを仕込み、明久と俺を始末しようとしたよな…隠していたのはお前だけじゃ無いらしいぜ？」

点数差に関係なく急所…頭、首、心臓を貫けば召喚獣は即死する。

だからちよつとした武器でも殺しきれぬ。

清水は召喚獣を操作し俺から離れようとする。

バカが！ブロードソードは重い…振り上げた反動でお前の召喚獣は海老反りになって姿勢を崩す！

「しまつ「うおおおおー！！！」

落ちていたナイフを拾い、清水の召喚獣の首へ突き刺す！

「形勢逆転だな清水。一つ言い忘れていた…他に武器は持ってないつて事。嘘ついてごめんな！」

俺は気さくに清水の召喚獣に止めを差し、その場に座り込んだ。

清水は悔しそうな表情でフォークを拾い集める。

「ハツタリも使いよう。ポーカーフェイスの基本だ…覚えときな。」

「…次は勝ちます。勝って御姉様を戴く日まで美春は諦めません！飯は返しますから首洗って待っていなさい！」

「うるさいなー早く補習室に行けよ。」

この後、突如として現れた西村教諭に清水は補習室へと連行されて行った…。

俺はその場で寝転んだ。

「はあ、はあ、はあ… 全体力を使い切った… 帰るか。」

<化学>

「2・F：松下啓吾」4点

俺はフラフラな足取りでFクラスに戻るのであった。

- - - - -

Fクラスの教室に帰還した俺は畳の上で寝ていた。

「松下… 清水を撃破したそうだな。」

「何とかな。もう疲れたよ。」

「そうか、そいつは結構だ。」

「少しは誉めてくれよ…。」

「めんどくせえな。まあ、清水を倒した事は感謝しよう。少し休め

…島田と秀吉は頑張ってくれているし、時間はある。」

「雄二…明久は？」

「明久は島田に羽交い締めになったのを理由にサボりたいと言ったから、《逃げたら49人でランチする》と言って脅した。」

明久…強く生きろよ。

雄二と談笑していると、須川が駆け込んできた。

「坂本、松下！吉井からの伝言だ！先生たちに偽情報をながしてくれ、と。」

相当苦戦しているのか…Dクラスも必死になってきたな。

俺は会話に参加せずに黙って聞く。

「時間稼ぎか…ムツツリーニ！」

「……ここに。（シユタ）」

「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

「……船越先生。」

「そうか。だったらこれを校内放送でながせ。」

須川が確認する。

「ほお。イカした作戦じゃないか。行ってくる！」

雄二が渡した紙を見た後、須川はとてつもなく笑顔になって教室をでていった。

「雄二、お前は何を渡したんだ？」

「そうあわてるな、そのうち嫌でもわかるさ」

「まあ、お前が言うなら期待する。」

俺は鞆を枕がわりにして寝ていると、

《ピンポンパンポーン》

校内放送だ。

「お！来た見たいだぞ」

《船越先生、船越先生》

この展開は…。

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「」「」「ぶっ！！」「」

眠気が吹き飛んだ。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「無理だな。」

「過小評価するのう。得意教科ならばAクラス最上位クラスではないのかの？」

「…本当の敵は点数の高い奴じゃない。」

「まさか…ワシ達の知らぬ刺客がいると言っののかの？」

俺は危機感を込める。

「清水がやられたのにも関わらずDクラスの連中、まるで動揺していなかったんだ…この引っ掛かる何かが、来ている。」

その時ムツツリーニから通信があった。

「どうしたのじゃ？」

『……松下。横溝が塚本を撃破した！』

「塚本は確かムエタイとボクシングを組み合わせた拳法持ちだったな…よく倒した。」

『……だが新校舎側にいる一部の突撃部隊が襲われ、回収が遅れている。中堅部隊及び啓吾は援護を！』

「秀吉、皆を。俺が先行する！」

「了解じゃー！」

嫌な予感がする…死ぬな明久！

- - - - -

視点：明久

『……残存戦力は24VS15！押しきれ明久！』

僕も島田さんも、持ち点尽き、作戦尽き、体力尽き…もう持たない。

<総合科目>

吉井明久：514点

島田美波：767点

ひっきりなしに続く連戦、乱戦。

雄二はもうすぐ戦争は終わると言ったけど、これは酷い。

「吉井…これ本当にやばいわ！」

「それよりも船越先生の方が恐いんだけど！いやあああ！（…）」

船越先生の息が荒い…結婚の為なら単位を楯に脅す残虐非道、邪知
暴虐な教師だ！

僕は雄二に売られた：絶対ころす！

と思うのも束の間、Dクラスの教室から御下げのツインテと金と茶の混ざった髪の子が出て来た！

「アキちゃん！ハアハア！」

「わてが相手や！いてこましたるっ」

<総合科目>

玉野美紀：1567点

仲沢好美：1472点

後ろから啓ちゃんが走ってきた！

「加勢に来たぞ明久ー！試験召喚っ！」

「島田よ！よく耐えたの！下がるのじゃ！」

「秀吉！多分Dクラスの近衛部隊だ！」

<総合科目>

松下啓吾：1006点

木下秀吉：674点

何時もなら2000点ある啓ちゃんもボロボロだ…。

「手出し無用！わてが仕留めるから、あの二人を追っんや！」

「「「「「了解！」「」「」「」

Dクラスの生徒が10人走ってくる！

「逃げるな！」

「吉井と島田を援護するんだ！」

生き残っていた仲間たちが壁を組んで行進する！

「統制をとる暇はない！近衛部隊と中堅部隊、予備戦力は全員突っ込めー！」

この声は雄二か！

背後から雄二が渡り廊下を走り抜けてきた！

ここで会ったが百年目え！

「雄二！しねえええええ！」

僕は鉛筆を投げる！

「横溝バリアあああ！」

カカカカカッ

やるな雄二、だが負けな！

（ゴキッ）

左腕の感覚が無くなった。

「ナイス島田。」

「松下と秀吉が交戦してるわ。相手は玉野さんと例の転校生よ！」

僕がうずくまっていると、ムツツリー二と須川君も合流する。

「……Dクラス代表は平賀源二と断定。近衛部隊は玉野と仲沢だけ。」

雄二は時計を見てにやけた。

「そうか…他クラスの生徒の下校の時間だ。時間は稼いだ、人混みに混ざり全員逃げろ！」

島田さんが、

「木下と松下は!?!」

「あいつらはそうは負けない。」

「……残ったのは俺と須川だけ。Dクラスの歩兵は後3人。」

「8人残ったか。向こうは6人。」

他のクラスの生徒たちがぞろぞろと歩く…帰宅するべく。

「待って!逃げないでアキちゃん!」

「まだ勝負は着いてないで！」

啓ちゃんは秀吉を引つ張って逃げ出してきた！

でも相手の二人は凄い！人から人へつたっている。

「清水といい二人といい滅茶苦茶だ！」

駄目だ、追い付かれる！

…なら攪乱すればいい！

「明久！？バカ！自分の位置を見せびらかすな！」

僕は啓ちゃんに、

「大丈夫さ！喰らえええー！！！」

僕は消火器を二本持ち…噴射あ！

プシューウウツッ！

大混乱となる廊下。

「アキちゃ、見えな、何処！？」

「見失ってしもうた！」

…どうやら二人を撒いたみたいだ。

「勝手に消火器を使用したバカは誰だ！」

鉄人の怒声が聞こえる。

知るか！

逃げるためなら仕方無いんだよ！

僕たちは慌ててFクラスへ飛び込んだ。

- - - - -

視点：啓吾

Fクラス教室。

鉄人の怒声が鳴り響く中、

「それで、Dクラスの女子のコンビはどうだった？」

雄二が俺に聞いてきた。

「かなりのもんだ…二人とも清水並に強かった。《武器職人》と《完全演技》でさえ点数は削りきれなかった。」

「大問題だな…明久は。」

「あいつは《観察処分》者だ。実力を公には出来ないと言ったのはお前だぞ。」

須川が姫路を連れてきた。

「雄二！姫路の回復試験が終わった！」

「はあはあ…終わらせました！」

そこへ、この戦争の切り札であり、現在全科目のテストを受け直した姫路が到着。

最後に受けたテストは振り分け試験の為、途中退席した彼女は全科目0点だった…しかし彼女は無事に全ての科目を受け直す事が出来た。

「吉井君、大丈夫でした？」

「あいつなら大丈夫。生きてるよ。」

「本当ですか？良かった…。」

俺は姫路にガッツポーズをする。

「あいつとは幼稚園の頃からの付き合いだ…精神力は間違いなく学園全一だ。」

『ピンポンパンポン 船越先生、船越先生。至急2年Fクラスに来てください。吉井明久君が教師と生徒の垣根を越えた、』

明久が泡を吹いた。

「信じがたい？」

「あつ、あははっ……」

「秀吉：声真似をするのはいいが、死者が出るなら止める。」

「済まぬのう。一度からかってみただけなのじゃ」

<補足>

船越教諭

45歳独身

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。

「つくづく思うが、明久は可哀想だ。よりもよって船越女史の生贄に捧げるとは、雄二も中々やるな。」

「あつ、あの……。」

「明久、生まれの不幸を呪うがいい。」

「吉井君：本当に大変なんですね。」

身心ともに虚無と化した明久の姿に俺と姫路は苦笑いするしかなかった。

ガラッ

俺は立ち上がる。

雄二は不敵に笑う。

「代表自ら出陣か。」

雄二はにやにやしてDクラス代表を見る。

「散々コケにされたからね…坂本！俺が直々に手を下してやる！」

後ろには玉野と仲沢がいる…さらにDクラスの生徒が3人か。

「ま、済まなかったな…こっぴなったらとことんやろうぜ、《皇王》さんよお！」

「舐めるな！地獄帰りの《悪鬼羅刹》程度にバカにされてたまるものか！！！」

FクラスVS Dクラス。

最後の激戦が始まる。

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！（後書き）

初バトル：いかがでしたか？

更新のペースが不定期で済みません。

えー次回は登場人物を紹介します。

PV5000突破しました。

読者の皆様に感謝！

登場人物紹介3 (前書き)

三回目ですな。

前回紹介しなかったFクラスのメンバーに関して説明します。

登場人物紹介3

横溝 浩二（変更点のみ）

・《地獄の番人》と恐れられている。二年生の中でも屈指の持久力を有している。機動性は一般人クラスだが、フルマラソンをしても息切れ一つしないと言われている！

・ F F F 団副委員長。 F F F 団についてはここで一気に説明する。

< F F F 団：階級一覧 >

・ F F F ランク

戦闘力は軒並み高く、かつ能力が異常に高い者のみが在籍する。

メンバー：須川亮、ムッツリーニ

・ F F ランク

かつては非常に優れた実力を持っていたが、諸事情で鈍りに鈍った者が在籍する。

メンバー：吉井明久、坂本雄二

・ F F ランク - 非戦闘員

戦闘は不得手だがある分野で優秀な技量に富んだ偏屈者が揃っている。メンバー：松下啓吾、横溝浩二、木下秀吉

・ F ランク

メンバー：上記記載された七人を除く。

(備考)

- ・ F F F 団の参加資格は特に定められていない。
- ・ 3年前に須川と横溝が立ち上げた『リア充撲滅委員会』が元になっている。
- ・ 他クラスにもメンバーがいるが、詳しい情報は無い…資料の収集を求ム。
- ・ 下克上は盛ん。特に F F F と F F は入れ替わりが激しい。

島田 美波(変更点のみ)

- ・ 天性の怪力の持ち主で、総重量 150kg の衣類を身に付けられても何不自由なく生活することが出来る。
- ・ 日本に来てから護身術として、自衛隊格闘術(自衛官の白兵戦・徒手格闘戦の戦技として編み出された格闘術である。)の一つ、徒手格闘を学ぶ。
- ・ 柔道と相撲の投げ技で牽制し、合気道の関節技とプロレス技で畳み掛ける戦法をとる…近接格闘戦に持ち込まれぬよう心掛ければ勝てるだろう。

姫路 瑞希（変更点のみ）

- ・文月学園3年Aクラスに兄が在籍。
- ・それ以外に情報が存在しない…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0891x/>

バカとテストと召喚獣 ~ 伝説と呼ばれたバカ ~

2011年10月12日09時53分発行